

日本文學西洋紹介の嚆矢としての

「浮世形六枚屏風」——特にその英譯について——

幣原道太郎

日本文學が翻譯、梗概、鑑賞乃至批評の形式で海外に紹介せられた跡を辿る事は日本と外國との文化交流に關心を寄せざるものには少からざる興趣をそゝるものであるが、日本文學に關する片言隻語的言及ならば、相當古くから中國や西洋の文獻に散見するが、今茲に問題にするのは纏つた作品に就ての事であつて、それもかの天草版平家物語などは原作のローマ字轉寫であり、内容そのものゝ紹介ではないから日本文學海外移植の見地からは、暫く省筆に従ふこととする。

さて、筆者の管見に入つたところでは此方面の文獻としては比較的古いのは、山陽の叔父頼杏坪（寶曆六（一七五六））の「演盆裁（波知乃變）」（天保五（一八三四））の漢譯。寫本一冊。水田紀久氏藏）であらうが、石崎又造氏の「（近世日本に於ける）支那俗語文學史」を中心（近世日本に於ける）に拾つても、「太平記演義」（太平記の譯。五卷五冊。岡島冠山。享保四年）、「譯文由縁看月」（蘭八節「ゆかりの月見」

の譯。一冊。杜遷介。寶曆八年。「近世文學未刊本叢書狂詩狂文集」所收。「四鳴蟬」（謡曲「熊野」）、「賴政」、歌舞伎「山崎與次兵衛道行之段」、淨瑠璃「大塔宮曦鎧」の譯。一冊。亭々々逸人。明和八年。「阿姑麻傳」（淨瑠璃「戀娘昔八丈」の譯。一冊。清無量軒。安永六年。「新百家說林蜀山人全集」所收）、「日本忠臣藏」（淨瑠璃「假名手本忠臣藏」の譯。三冊。鴻濠陳人、文化十二年。）、「櫻精傳奇」（淨瑠璃、歌舞伎の櫻姫説話の譯。二冊。是亦道人。文政十三年）、「國姓爺合戰」（第三回樓門之段の譯（長崎通事周文二右衛門）（新群書類從第二所收西澤一鳳「南水漫遊拾遺二の卷」には同文二右衛門とあり）、「春山無著錄」（近松作の譯を收む。一冊。長崎唐通事譯）等を擧げる事が出來、就中、「假名手本忠臣藏」の譯は、忠臣庫と題し、乾隆五十九年の刊本に訓點を附し、文化十二年に刊行せるものを、更に、「海外奇談」の名で龜田鵬齋

の序を附し、文政三年に重刊したもので、年代的にも内容的にも特筆すべき勞作である。

但し拙稿に於て取扱ふのは紙幅の関係上、西洋文獻に限らざるを得ないが、この方面のものとしては今迄の所、柳亭種彦(天明三年(一七八三)生、天保十三年(一八四二)歿)の「浮世形六枚屏風」の歐譯を遡るものを發見し得ない。

さて、この「浮世形六枚屏風」は文政四年(一八二一)刊行の紙數僅か三十葉に過ぎぬ草雙紙合卷で、内容的にも決して種彦の作品中傑出したものでもなく、いはんや日本文學作品として秀作とは云はれないのに夙くから數種の歐譯が逐次印行せられ、その最初のもの、日本文學歐譯の鼻祖と稱せられ、諸先學の注意を惹き、書誌學的に闡明しつくされてはゐるが、筆者も精細に披覽の機を得て愚考を附加したくもあり、殊に英譯本に就ては從來その檢討が未だ充分とは云はれないので、些か附言して置きたい。

處で、順序としてこの歐譯發見の史的展望より始めることとする。

この日本文學海外紹介の先驅的作品とは、一八四七年(弘化四年)に、オーストリア人アウグスト・フィッツマイエル(August Fitzmaier, 1808-1887 東洋學者で日本の言語、文學の先達として知られ、萬葉集の塙譯の他、扶桑拾葉集の譯(1871)やアイヌ語に関する著作あり)が首都ウィーンに於

日本文學西洋紹介の嚆矢としての浮世形六枚屏風(幣原)

て譯出刊行したもので、Sechs Wandschirme と題せられ、菊判型、茶褐色紙表紙、洋紙袋綴じの和書風の装幀に、内容は翻譯文と原本の模寫複刻(但し變體假名の細字はその大きさや字配りに異同あり)とに折半せられ、卷頭に「日本名作集第一編」(Japanische Chrestomathie Erster Theil)と記してあるが、他の翻譯が續刊せられたか否かも詳かにし得ないが、或は計畫のみに終つたのではあるまいか。なほこの譯本の詳細は後述の故龜田次郎氏の論攷を參看せられたい。

さて、此の歐譯を最初に紹介せられたのは故饗庭篁村であつて、明治廿七年十一月の「早稻田文學」誌上に發表し、後その「雀躍」に收められた「種彦が作の蘭譯につきて」と題する一文であり、後、坪内逍遙、水谷不倒共著「列傳體小説史」(明治卅年刊)にも収録された。彼は蘭譯と誤認しつつ、この塙譯本を紹介したやうであるが、該論說中で「上略一中堀氏(筆者註、水谷不倒氏友人)曰く、予未だ蘭書を繙きしことなければ、此の書が蘭書なりや否やを明言しがたきも、文法は獨逸語とほゞ同じ、聊かの相違は文字と語尾とにあり。其の出版所の澳都維也納なると、殊に譯者が政府の保護を受けて翻譯に従事せし趣あるによりて按ずれば、此の譯本は澳太利語なるべしと。果して然らんに譯者も亦澳國人なるべけれど、今之を知るに由なし。今より四十七年の昔は、我が國法阿蘭陀人を除きては一切他國人の入るを許さず。されば

フィッツマイエル氏は、澳國人にてありながら、國禁に觸れんことを恐れて殊更に蘭人と稱して我が邦に入込みしが、又其の人の譯なるゆゑ澳語なるをも蘭語の譯と誤り傳へたるか。云々」とも記してゐる。然し新村博士によると、かのジールボルト Stebbins が天保元年(一八三〇)、日本を去る時、この原本を和蘭に持歸つたらしい事は彼がホフマンと共編の蒐集書目(一八四五年ライデン刊)中にその書名が見出される點から明らかで、それが一八四七年(弘化四年)に奥國に於て獨譯されたと記してゐられる。然し、博士が此譯本が後、日本文學讀本のうちに再刊されたと云つてゐられるのは、この再刊本が管見に入らぬので何とも云へない、なほ鈴木重三氏も記してゐられるやうに、文中近松の曾根崎心中の道行文を他所事淨瑠璃式に用ひてゐる箇所があり、之が韻文譯せられてゐるから、フィッツマイエルは間接に近松の譯の先鞭をもつけたわけである。なほ、鈴木氏は此奥譯本の底本を文政四年刊の板本と斷定され、此原本の體裁に發刊當時既に合卷に通例の錦繪表紙をつけた四六判型のもと、無地表紙の半紙本型のもとあり、奥譯は此の後者に據つたらしい事を半體紙本の題簽の字體、大きさが奥譯本の邦文の部、表紙の字に酷似せる事より推定してゐられるなほ、此の奥譯本は今日傳存が極めて稀で K B S ・ L I B R A R Y 本の外には、故幸田成友博士、故龜田次郎氏(國立國會圖書館現藏)、及び勝

本清一郎氏が夫々一本を藏せられてゐる事を知るに止まる(寛村が披見したのは檜崎海運氏の所藏本だつたらしいが現在はその所在を明かにし得ない。又東大圖書館本は關東大震災で焼失した)

次に奥譯本に關する右篁村を始め其他の諸論説を詳しく紹介、補正し、ひいて英譯本のことにも論及してゐられるのが故石川巖氏で——氏自身は奥譯本實見の機を得なかつたらしく、又氏に先立つて篁村自身も「早稻田文學」誌上で些かの英譯本に觸れてはゐられるが——こゝに始めて英譯本の全貌が顯現せられるに至つたのである。乃ち氏は、「書物の趣味」第四冊(昭和四年六月刊)に、「松園梅彦翻刻『浮世形六枚屏風』に就て」の題下に縷説してゐられるが、それによると雑誌「芳譚」第八號(明治二十一年刊)以下に連載の「浮世形六枚屏風」の原文の卷頭に附した解題に、在長崎の蘭人の譯が種彦の門人四方(松園梅彦)の手に入つて明治二年翻刻刊行し、又、三代種彦の高島藍泉が横濱でそれを購入したことを述べ、次號で、蘭人の譯本といつたのは英譯の間違ひであつたと訂正してゐる由であるが、この高島本の事は三品蘭溪氏が「早稻田文學」の草双紙の研究號で發表してゐられる。

この「芳譚」収録の論及について明治三十九年刊大久保葩雪の「増補續青本年表」(新群書類從第七書目三九七頁)にも奥譯本への言及があり、更に、明治二年東京に於て本書の英譯本が原文の翻刻を添えて上梓せられた事を記してゐる。又、故朝倉氏の「小説年表」の解題にも「明治二年に松園主

人其粗筋を英文に綴り横濱に於て發兌せり云々」と見えてゐる。然し後述するやうに松園梅彦は編集者ではあつても英譯者ではなく、又、筆者の實見によると、此明治二年の再刻本はもとより、その親本たる慶應三年の初版本にも刊行地について、横濱の文字は見えず、松園藏版とある丈で後者には書肆名の記載が全くなく、前者には大阪心齋橋通り、伊丹屋善兵衛以下、東京小石川大門町、雁金屋清吉に至る十三軒を舉示してゐるに過ぎない(新村博士はこの最後の書肆名から、東京を出版地としてゐられるが)。

さて、石川氏は右論攷中で前記諸説に見えた梅彦の邦英兩翻譯本が何れも明治二年發兌となつてゐるが、同じ梅彦刊本に「慶應三丁卯歲仲夏」の刊年記ある實物を目撃してゐられ、齋藤昌三氏藏明治二年刊本と比考せられた結果後者を慶應三年版の再摺本と推定された。初版本には見返し扉に刊年の記載があるが、再版本は慶應以下の文字を削り「明治己巳歲初冬」の文字を収めただけで再刻の文字もなく、内容は全部同一板木をそのまま使用してさながら新版のやうに装つてあり、石川氏は「本文は恐らく慶應三年の刷本の殘部を使用したものに過ぎまいと思ふ。」と云はれた。又、装幀は、慶應版の扉用紙が黄色地で、明治版が白色である相違がある丈で、表紙は何れも黄色で、題箋文字は扉と同様「浮世形六扇屏」とあり、英文の題箋には Account of a Japanese Romance とある。邦文の方は梅彦が原本の平假名を漢字混りに書改め

て翻譯したもので、その際同時に別冊として英文を添付したもので、兩者共に木版整版本である事は疑ふ餘地がない。(英文には誤植が可成り目につく)但し壞譯本の體裁に倣つて邦文は右から英文は左から綴合せた合冊本も印行せられてゐる。譯は題名の示すやうに荒筋丈けの意譯に近く、西行の歌や近松の道行文なども省略され、種彦原作の序文や挿繪(初代歌川豊國)も除かれてゐる。譯者名は全然記載されてゐないが、石川氏は「果して梅彦の譯か否か不明であるが、よし多少の誤譯があつても、あの當時としては寧ろ驚異すべき事象の一つである。或は邦文から譯したものでなく、壞文から譯した英文かも知れない。」と記してゐられ、大體、梅彦自身を譯者に當てゝゐられるやうだが確證はなく、筆者はこの點私見を有するので茲に附言して置き度い。

抑も梅彦は江戸戲作者の一人で狂言作者としては、竹柴瓢藏といひ、別名を柴垣其文とも稱し、明治二十九年十一月八日(一説に四日)七十五歳で歿した由が狂歌人名辭書に見えて居り、又、大正十五年四月發行の「早稲田文學」明治文學號(第五號)所載の野崎左文翁の説に據ると、梅彦は神田の四方といふ酒舗の主人であつたと云ふ。著作は「江戸鹿子紫草紙」以下合卷物十數篇の他、「萬國旗鑑」、「五國語箋」の著があり、其他英蘭佛露の邦譯などもある位だから、この英譯位は實際遺つたかも知れないと石川氏は云はれるが、内容を

熟讀すると翻譯當時の邦人の英語としては何としてもこなれ過ぎた感があり、且邦人なら誤る筈のない固有名詞の誤記が見出される(例へば佐吉を *Sakisi* お花を *Wofana*、戸平を *Tofei*、亭太夫を *Teidaitu*、朽葉を *Kutsiwa*、正直爺を *Sioziki Dzitsi-i* とせる如き) から外人の筆になるものと見るのが妥當のやうに思はれる。然らば譯者の國籍如何といふと文中、*labored, neighboring, neighbor, favor* などの如きアメリカ流の綴りが見られる上に、更に決定的な論據として原文の「百兩」を *a hundred taels* と譯し、その附註に *Very nearly a hund and forty dollors of our currency* とあるので譯者が米人である事は疑ふ餘地がない。

次に譯文の底本については、抄譯のため直接原文から譯出したのか、塙譯からの重譯か判然しないが、どうも後者らしく思考せられるのは當時の一般外人でこの程度に日本文を讀みこなせる人物が居たとは想像出來ない點から首肯せられるが、これも單なる推定で後考を俟ちたいと思ふ。この英譯本は初刻再刻兩本共矢張り稀覯本に屬し、鈴木重三氏の他、上野圖書館、故池田金太郎氏及び中島健藏氏の所藏本以外には聞知しない。

次に拙稿に於ては原文と、この英語抄譯本と次に記す英語全譯本とを比較して見たいのであるが、それに先立ち、この種彦の合巻の海外紹介の進展の跡を引續き辿り度いと思ふ。

石川氏について、新村出博士は「佛敎文學」第三號(昭和五年一月號)(後「典籍雜考」(昭和十九年)に收録)に「柳亭種彦が浮世形六枚屏風の歐譯」と題し、前述の塙、英譯本に言及せられ、更に、ロンドンの東亞研究誌 *Phoenix* に連載された牧師 *S. C. Malan* の英語全譯(但し原文の種彦の序文は省かれてゐるが)“*Misawo, the Japanese Girl*”を紹介せられ、又、未見の佛伊兩譯にも觸れてゐられる。この英譯は既に *Wenckstern* の「大日本書史」にも收められ、衆知のものであり、該誌第十、十一、十二の各號(一八七一年四、五、六月)に連載され、博士は譯者の底本を明治二年の梅彦再刻本邦文部と推定して居られるが、該全譯本にはその前書きにフィッツマイエルの塙譯の邦文部から譯したが正確を期する爲め他日日本版の原典を見たく思ふ旨が記してあり、現に本文を見るとフィッツマイエルの誤譯と類似の誤譯が散見するから塙譯本をも参考したと思はれる。

なほ、博士はジュネーヴで刊行の雜誌「晚採草」所收の伊太利人 *Turretini* の佛譯や同じく伊太利人 *Severini* の伊譯についても簡單に紹介せられ、共に未檢の由を斷つてゐられる。この中、佛譯本については後述する所に譲り、伊譯本についていふと、筆者は *KBSLIBRARY* 其他の好意で以上の諸譯本を悉く披閱する機會に恵まれたが、只一つこの伊譯本には現在までの所不幸にして解近しない。然し博搜を

つゞけてゐるので近い將來にその事あるを期待してゐる。此伊譯については前記ウエンクステルンの「大日本書史」によると、一八七二年伊人セヴェリーニの譯 *Domnie Paraventi* がフィレンツェで出て居り、又、同じセヴェリーニが一八七六—七七（明治九—十）年に同市出版の *Boletino italiano degli studi orientali* 第一卷に八回に互り連載したものであるようで、佛譯と同様に「小松と佐吉」と題されているといふ。新村博士はマランの英譯を佛文に重譯し、その佛文を更に伊譯したのではあるまいかと推考してゐられるが、セヴェリーニは佛譯者トウレティーニとも交際があつたといふから、佛譯か乃至は佛譯の底本と看做される梅彦邦文本かのいづれからの伊譯であつた事は充分に考へられるが、筆者未見だから確言は出来兼ねる。

故龜田次郎氏は「書物の趣味」第六冊（昭和五年十二月發行）に「浮世形六枚屏風の漢譯本」と題する一文を寄せ、篁村、石川兩氏の論及せられなかつた書誌的内容について細敘せられた。詳細は同誌を參看せられ度い。たゞ龜田氏は日本の文字は誰か日本人が書いたものであらうと想像してゐられるが譯者の緒言にはギーンの帝室、國立印刷所で活字を製作したとあつて日本人の助力については何等記すところがない。

更に龜田氏は「六枚屏風」歐譯本を追攷し、「書物の趣味」

第七冊（昭和七年三月刊）に「浮世形六枚屏風の佛譯本」と題し、小島祐馬博士架藏の一本によつて佛譯本を論究してゐられる。

この佛譯本は前にも觸れた「晚採草」(BAN-ZAI-SAU)といふ雑誌の第二、第三兩卷（一八七五、七六年）に連載せられたもので、別に單行合冊本もあり、それは綠色の表紙の假綴で菊判より少しく大きく、一八七五（明治八）年、日本文學紹介者として聞えた伊太利人 François Turrettini がスキスのジュネーヴで翻譯出版したもので Komats et Sakisi と題せられ、卷頭に譯者の序言を掲げ、次に小松、佐吉の各肖像畫二面、次に本文の順となつてゐて、左方偶數頁に原本をローマ字書きとし、此各行の下に原文を印刷してあり、右方奇數頁には佛譯文が印刷されてゐる。なほ、龜田氏は慶應乃至明治の梅彦の邦文版から採つた挿畫二面を加へ、挿圖四面とあるが、これは鈴木氏も云はるゝ通り、此他更に塙譯本所收の圖版二面が轉載されてゐるから合計六面となる。なほ、小松、佐吉の畫像は種彦の原著からとつたと記されてゐるが、これに就いて鈴木氏は反駁せられ、之も塙譯本からの轉載である事を三者の比較から結論せられ、又、龜田氏が此の佛譯の底本を、そのローマ字書き本文と譯者の序言とから推して梅彦邦文本としてゐる事には贊成されつゝも既述の挿圖の點より類推し、多少とも塙譯を參照した事は臆測されてよ

かろうと云はれるが此點は檢討の餘地があるやうに思はれる。

最後に此佛譯本も存在が比較的稀で、KBS LIBRARY本以外には龜田氏舊藏(國立國會圖書館現藏)本其他少數を聞知するに過ぎない。

次に、小牧健夫氏は「文藝春秋」(昭和七年五月刊)誌上で、「フィッツマイエルの日本文學譯本」と題し、その翻譯を批評してゐられるが、今少しく援引すると、「翻譯の出來榮になると、どうしても手際が好いとは云はれない。それも參考材料の乏しかつた當時としては無理もない。譯者があらゆる國語中で最も六つかしいものであると云つてゐる日本語を兎も角これだけ譯し終へた事は一と通りの苦心で無かつたらう。開拓者はいつも嶮しい道を歩かなければならない。どんなに其道が嶮しかつたかは、始から終まで躓き通してゐるのでも分る。」と云はれ、一、二、三の例を擧げ、誤譯を指摘してゐられる。

さて、以上諸先學の研究を簡勁に展望し、日本近世文學專攷の見地より内容的批判を加へられたのが、鈴木重三氏が日本古書通信第十九卷第十一號(昭和二十九年十一月發行)に載せた「『浮世形六枚屏風』の歐譯書」と題する一文である。氏の結論では、原本翻譯の経緯は、江戸末期に種彦の原著の半紙本型の方が或る來航者の手で海外へ渡り、フィッツマイ

エルは之によつて壞譯し、慶應三年何かの事情で(多分この壞譯本を參考して)英語の略譯が出、更にマランの詳しい英譯が壞譯から出來、一方慶應に出た邦文版と前記壞譯とを參照して佛譯が(恐らく伊譯も同源から)生れたのであらうといふ。然しマランの詳譯が壞譯本に基づいたものではなく壞譯本添付邦文部に據つたものである事は前に述べた通りである。

最後に本邦人ですら餘り注意の對象とせず、且種彦の著作中でも凡作に屬する此の原著が、何故に歐譯の對象となつたかに就いて、石川氏は、原著者自身序文中で記してゐるやうに、恐らく比較的説話の筋が簡單で冊子も手頃であり、挿畫も當時有名な初代豊國が描き、殊に脚色の全體に互つて荒唐無稽な怪談や血生臭い所がないし、義理人情を盡した家庭の讀物として無類な點が外人の氣に叶つた所以ではなからうかと云はれ、鈴木氏も、恐らく當時流行の殘忍怪奇を殊更避けた事を強調したその序文が西人に受けたのであらう事を指摘してゐられる。

さて、此日本文學海外紹介史上特筆すべき譯書の内容檢討に入り度いが最早紙幅が充分でないので梅彦本(初刊)英譯とマランの英譯とを原文(續帝國文庫本に據る)と比照して、二、三の箇所を擧示するに止め度い(英譯の底本には前者は鈴木重三氏所藏本、後者はKBS LIBRARY本を使用さ

せていた。厚く謝意を表する次第である。) 先づ巻頭の綱干多門太郎員好が大磯方面へ遊獵に赴いた一節。

「頃しも秋の末つかた今を盛りの紅葉見がてら射鳥狩せばやとて兼てしつらへ置し大磯の下館へ趣むき日めもす遊び暮して早黄昏の頃鴨たつ澤にぞ至りける、實に。心無き身にもあはれは知れけり鴨立澤の秋の夕暮。と西行法師がよめりしも宜なり遙か人家に引離れ只かたけらに古たる辻堂の立るのみいと物さびしき所なり」

を、梅彦本には、

Once, towards the end of the harvest, he went out on a hunting expedition to one of his chateaux, and, after wandering about all day, came towards dusk to a place called the Snipe Marsh.

と簡單に筋だけ述べてゐるので、Malan せ

One day towards the latter end of autumn, as he held the momidgi-trees clad in their bright red foliage, he made up a party to go and shoot the birds that flo-cked to them; and started for one of his hunting palaces on the shore of Kanazawa, which had been made ready for him beforehand. After sauntering the whole day on his way thither, he came about dusk to the marsh, so-

called, "of the Rising-Snipe," as he gave out, without intention, but only to look about. For it stands to reason, that in an autumn twilight, a snipe-ground like this would prevent one from going any farther that day. It was removed far from all human habitations with only one old house standing by a cross-road; altogether a most lonely spot.

と可成り忠實に譯出してある。

次に、戸平の娘小よしが桃の節句を忘れない可憐な姿を敘して、

「あぐれば三月三日にて桃の節句の事なれば小よしは早く起出て一ツ二ツ賣殘せし雛を母の鏡臺の上に並べて餘念無く遊びくるふや大張子口のかけたる徳利に桃は手折てさしながらかゝる貧しき住居にていつ花咲の爺婆の赤本明て片言まじり雛に晝ときして聞かす子供に罪は無かりけり」

とあるのが梅彦本でせ

On the morning when Saizo was expected, which was the day of the peach-festival, Koyosi was playing with several dolls which she had arranged on her mother's dressing table; and as she had only one peach for herself, and none to give to her mute little ones, she undertook to entertain them by telling some stories out of her

picture-book, called The Parents of the Flowery Field.
よなひのぼる。聲が Malan ぞ'

The day dawned. It was the third of the third month, and the feast of peaches. Koyosi got up early and arranged on the stand of her mother's looking-glass, one or two small figures that remained of the sale of the household furniture. And, bent on play, she took in her hand a peach from a jug hanging on to the mouth of a box, in shape like a dog, and in keeping with the poverty of the house, she opened her picture book at the print of "the father of the flowery mead;" and then in her childish, aimless prattle, explained it to the figures as if to children that were not to blame if they did not understand her.

とあつて多少の誤譯があつても原文に一層忠實である。又、小松と佐吉が手に手をとつて驅落ちする場面の發端、上るり「此世の名残り夜もなごり死に行身をたとふれば仇しが原の道の霜一ト足づくに消て行夢の夢こそあはれなれ。あれかぞふれば曉天の七ツの時が六ツ鳴て残る一ツが今生の鐘の響の聞をさめ」

は梅彦本には全く省略されてゐるのに、Malan は
This world passing away,

Passing in a night,
Goes on to death.

To what is life compared?

To the hoar frost

On the path of the changing field,

Where by one foot after another

It melts and disappears.

Wilt thou count those marks,

When by the seven-bell at morn

The sixth has gone,

This world is—the one echo left

Which, as the bell rings,

Buries itself into the ear.

のやうに譯してゐる。塙譯本の邦文部を底本として、たとへ塙譯其他を参照せるにせよ、英語の全譯を遙か英京に於て八十有餘年前完成した Malan に筆者は日英文學交流史上の一位才を見出すやうに思ふ。なほ英譯内容の一層詳密な検討に入り度いが既に餘白がないので一先づ擱筆する事とした。

(昭和三十年八月二十日)